

## 続・保育の中の小さなこと大切なこと ⑨

守 永 英 子

今年は、久々の三歳児との出会いである。私たちの園では、三年間続けて、同じクラスを持ちあげることが多いので、三年ぶりの三歳児クラスの担任ということになる。

三歳児を担任して、三年間育て、卒業させて、又三歳児に戻るといふこの巡りは、今までに何度も経験していることであるのに、改めて、三歳児に会ってみると、又、新たな感慨が起こる。

三歳児というと、そのほとんどが、家庭から初めて集団生活に入ってくる子どもたちである。これからの長い人生の、社会生活の始まりが、子どもにとって、快いものであってほしいと願う保育者は誰しも、大変に優しい気持で、入園してくる子どもたちを迎えることと思う。私も例外なく、そのことに充分心を配った。

入園二週間程終わった頃、母親から離れたあとぐずっているTのそばで、気を紛らすために絵本を広げている私のところ

に、二、三人の子どもが集まってきた。Rも、ままごと道具を籠に入れて、絵本をのぞきにきたが、突然、「先生ってやさしいだね。先生も、おなかから生まれてきたの？」あまりの唐突さに、彼の心を計り兼ねて、とまどいながらも、「そう、先生も、先生のおかあさんのおなかから生まれてきたの。Rちゃんと同じね」と答えると、彼は、「うん」と満足したようであった。三歳児の心は、ときどき計り知れないものである。

入園後三日目に、「幼稚園を楽しい」とRが、ポツリと言った時も、不思議な感じであった。彼女は、まだ幼稚園の生活を楽しめていないと思われる数人の中の一人であったから。ときどき笑顔は見せるものの、まだ何をしたいかわからないといった様子で、自分からの活動は、殆ど見られなかった。外見からは見えなくても、彼女の心は楽しんでいるのであろうか。三歳児が言葉で表現できるものの限界を思う

時、感じ取られながら表現されていない三歳児の心の世界の大きさに、ふと恐れを感じた。

面白いことに、初めは、楽と思われたこのクラスが、だんだん大変になってきたのは、Rが「先生ってやさしいんだね」と言った頃である。子どものさまざまな活動が、私の常識的な許容度をゆさぶるのは、彼等の自由感が増してくるのと一致するようである。

水槽の中に手を入れて、どしようやおたまじゃくしをつかもうとするYやN。水槽は手を入れたりしないものという生活の節度を守るようになってほしいという思いと、恐らく、水槽の中に手を入れてつかんでみることでしか、ある感触を経験することはないのではないか、この機会に経験させてもよいのではないか、という思いにゆれながら、「おたまじゃくしは、手の中より、水の中の方が好きなのよ」と言ってみる。「すぐ放してやるんだよ」と説明するNに、私の許容度は広がる。

帰る時間になり、ままごとをしているRに「もう、おかえりだから、片づけましょうね」と声をかけると、思いがけない拒否反応。「だめなの。今忙しいんだから。」やむを得ず、

「そのごちそうを食べてしまったら、片づけましょうね」と譲って待つ。

帰る時刻、庭に散っている子どもたちを呼び集め、帰り支度に忙しいひととき。庭から戻ってきたNが、「自動車の絵をかきながら、紙頂だい」という。時計を見ると、降園時刻五分前。「もうお帰りだから、あしたにしましょうね」と、のどまで出かかった言葉を飲み込んで、紙を渡す。説明して諦めさせることに時間を費すより、彼が絵をかいている間に、他の子どもの帰りを急いだ方がよいのではないかというところの判断である。丁度支度が終わった頃、彼は、絵をかき終えて、満足して帰って行った。不要なトラブルを起こさなくてよかったと、ほっとする。

子どもが、自由感をもって、ありのままに自分を出させる生活は、基本的に大切なものである。しかしその姿は、しばしば、おとなの期待や、許容の範囲に抵触する。この両者の間に、どのような関係を作っていくか、それが、今の自分に課せられた課題であると思う。そして、その課題にどう応えていくかが、二年後、三年後の、子どもの生きる姿勢の中に実ってくるものと思うのである。(お茶の水女子大学附属幼稚園)